

「東日本大震災における 保健師の体験記録の作成」 報告(第1報)

福島県郡山市保健所 斎藤 恵子

未曾有の被害をもたらした東日本大震災では、保健師活動も長期化する事が想定されました。そのため全国保健師長会では、活動方針の大きな柱として、被災地保健師の継続的な支援に取り組んできました。

被災地の支部と話し合いを重ねる中、連日の激務で現地保健師や社会福祉協議会の相談員が疲労していることがわかり、援助者への支援要望も寄せられました。会としてその要望に応えるべく、元全国保健師長会会長の大場エミ氏、同常任理事の藤山明美氏に援助者の心に寄り添った支援を依頼しました。そのような中、現地の保健師の方々から体験記録を作成したいという要望をいただき、会の調査研究事業としてまとめることになりました。今回はその第1報を

報告いたします。

◆体験記録を作ろうと思ったきっかけ

東日本大震災から3年半…。保健師の日常が戻ってきたような気がするの、思い過ぎなのかもしれない。あのとき、被災地の保健師はみずから被災者であったが、何かに追われ、まくし立てられるように夢中で住民と向き合い、対応にあたっていた。だれかに指示命令されなくても勝手に体が住民支援へと向いていた。本当は地震の被害、放射線被曝への不安など計り知れない「どっしりとした不安」を抱えている自分を、人には気づかれないように必死で仕事をこなしていた。

半年が過ぎようとしたころ、保健師の間から「この大震災を体験した私たちだからこそ、だれにも方からの言葉です。震災直後は自分でも不思議なくらい疲れを感じず、家に帰っても気持ち張りが詰まっている状態だったと思います。他県の支援チームの方からそう言われ、一瞬ハツとしました。動き続けていた私は、ある意味、自分の状況を客観的に見られない状態にあったのかもしれない。長期的な活動を続けていくために、保健師自身の体調を保つことの重要性を感じた言葉でした。こうして振り返ってみると、震災時の対応において支援者の力は大きいものだったと感じています。

④ 地震から数日後のある日、テレビから「建物の中に入りなさい!!」と怒声のような声が聞こえてきた。それは福島第一原発の爆発であった。一瞬体が震えたが、その後、市民の電話対応に追われた。市民からは「外がおかしい!放射能が雲と一緒に飛んでいるから見てみる!」と言われた。外を見ると黄色い霧のようなものが流れていた。

原発の爆発事故後、保健所では放射線スクリーニング検査が始まった。放射線汚染を心配する

言えない心の思いや保健師としての葛藤を100年先の保健師に伝えたい」という声が清水が沸き上がるように聞こえてきた。防災マニュアルや行動マニュアルには載らない、震災を体験した保健師だからこそ伝えられる内容があり、将来また起こるかもしれない災害時にいまの自分たちの心の葛藤を後輩に知ってもらい「過去の保健師達が乗り切った体験に勇気を奮い起こしてもらえればいいね」と気持ちひとつになった。

◆思いが届いた!

まとめた、という気持ちはあっても、どのようにまとめたらいいか思索していたとき、全国保健師長会から被災地支援で福島県内で働く保健師のメンタルサポートのために、現地へ何度も足を運んでくださった大場氏と藤山氏

人々が次々と保健所に押し寄せる中、測定後の除染作業のため迷彩服を着た自衛隊員がたくさんおり、まるで保健所は戦場のようだった。地震から3、4日過ぎたころから職員が一人二人と自分の子どもを避難させるようになり、私は徐々に焦りを感じるようになった。わが家では夫も私も地方公務員であり、休みを取り、どこかに子どもを避難させるような時間的余裕はなかった。

一方、職員の間にも、まるで「同志」のような強い結束ができていた。震災後「私はこのまま保健師の仕事が続いていいのだろうか」という思いに駆られながら仕事を続けている。行政で働く保健師として、一人の母親として、「いまやれることを、悔いなくやろう」と子どもたちにも自分にも言い聞かせている。いつ、何が起こるか分からない世の中で生き抜いていくため。想定外の災害を体験し、いまなお苦しむ私たちが言えることはそれしかないと思う…。

◆体験記録から学ぶこと、伝えること

皆さまからたくさん「保健師

に、思いのすべてを受け止めていただいた。そして、平成25、26年度の2年間、「東日本大震災における保健師の体験記録の作成」の調査研究を行うこととなった(編集会議メンバーは文末に掲載)。

◆原稿募集の経緯と内容

平成25年度に東北6県および新潟県の保健師長会支部長を通じて原稿を募集。現在までに64件の原稿が寄稿された。内容は「震災直後からの被災地での活動」「被災地への派遣」「避難者の受け入れ」といったもので、それぞれ置かれた立場での違いはあるものの、いずれも保健師の使命感が感じられ、被災地と支援側の保健師の思いをつなぐものであった。

◆体験記録の紹介

いままでにいただいた原稿の一部を紹介します。

① 震災直後、真っ先に頭に浮かんだのは子どもたちのことでした。その日は息子の誕生日。楽しいはずの一日が一変し、余震がある中、不安げな表情でいる3人を見ても忘れることができません。そんな子どもたちを祖父母に頼み、再び職場に戻るときは、身をちぎ

の思い」をいただいたので、調査研究の編集会議において、災害時における保健師の思い(コア)はどのようなものか、分析していくことにしています。また、応募原稿は、何らかの形で全国の保健師の皆さまに読んでいただけるようにしていきたいと考えています。原稿は現在も募集中です。被災地保健師だけでなく、支援に来てくださった自治体保健師の応募もお待ちしております。

【問い合わせ先】郡山市保健所 総務課 保健師・助産師・看護師 支援係 斎藤恵子 (TEL: 024-924-2120 / メール: saitou-keiko-a@city.koriyama.fukushima.jp)

【編集会議メンバー】アドバイザー: 平野かよ子氏(長崎県立大学)、大場エミ氏(恩賜財団母子愛育会)、編集委員: 松本珠実氏(大阪市)、古山綾子氏(福島県)、柴田恵子氏(いわき市)、山田祐子氏(南相馬市)、安倍敬子氏(富岡町)、吉田喜美江氏(浪江町)、佐藤ミイ子氏(川俣町)、代表: 斎藤恵子(郡山市)